

■演題 5 当院の十二指腸上皮性腫瘍に対する LECS の検討

代表演者：和田晃典 先生（防衛医科大学校 内科学 2）

共同演者：〔防衛医科大学校 内科学 2〕杉原奈央、塙芳典、堀内和樹、安江千尋、高城健、丸田紘史、  
穂苅量太、三浦総一郎

〔防衛医科大学校病院 光学医療診療部〕高本俊介、永尾重昭

〔防衛医科大学校 外科学 1〕辻本広紀

【背景と目的】十二指腸腫瘍の頻度は消化管癌の中でも稀であり、現状では治療方針は明確に定まっていない。低侵襲治療として内視鏡的切除も行われているが、術中術後の穿孔性腹膜炎が重篤な合併症として問題となる。十二指腸腫瘍に対する安全な手技として LECS の有用性が報告されており、当院でもこれまでに十二指腸腫瘍 11 症例に対して LECS を施行し、そのうち 7 例が上皮性腫瘍である。当院における十二指腸上皮性腫瘍に対する LECS 施行症例について検討を行ったので報告する。

【対象と方法】当院にて十二指腸上皮性腫瘍に対し LECS が施行された 7 症例 7 病変を対象とした。患者背景、病変の臨床像、手術成績、合併症等につき retrospective に検討した。

【結果】平均年齢は 63.4 歳、男性が 6 例、女性が 1 例、局在は上十二指腸角が 1 例、下行脚が 6 例であった。平均腫瘍径は 10.1mm、肉眼型は 0 - I 型が 1 例、0 - II a 型が 5 例、0 - II c 型が 1 例、病理組織は粘膜内癌が 5 例、腺腫が 2 例であった。病変の切除方法については、5 例が EMRC、1 例が ESD、1 例が腹腔鏡側からの切除であり、全例一括切除を得られている。平均手術時間は 139.1 分、平均出血量は 8.3 ml、術後合併症は、狭窄が 1 例、遅発性小穿孔が 1 例であり、術後在院日数の中央値は 9 日であった。

【結語】十二指腸上皮性腫瘍に対する LECS は病変の一括切除が可能でありかつ術後穿孔のリスクを軽減できる有効な術式であると考えられた。